

第3章 歴史的変遷におけるヨシと人とのかかわりの変化

3-1 開発前のヨシと人とのかかわり

琵琶湖のヨシ帯は、古来より琵琶湖の原風景であり、屋根葺きやすだれなど生活の一部に利用されてきた。かつて西ノ湖周辺では、ヨシ産業が盛んであった。生業は環境が悪化すると共に衰退してきたが、まだ、周辺環境が豊かであったころの豊かなヨシと人とのかかわりを文献調査とヒアリング調査でまとめた。

3-1-1 生業と儀礼

江戸時代から約400年続く西ノ湖のヨシ卸商では、今では簡略化しつつも、ヨシに関する伝統的な行事が行われている。

「儀式的な意味、これは昔から決まってるの。これは12月にはいった最初の子の日、その日にヨシ刈りの刈り初めの儀式をするの。昔は、その日にいろんな行事をしたんだけど、今はほとんど簡略化しとるけどね。今仕事場へ行くとその日に3束だけヨシを刈ってそれを三脚状にしとくわけ。その意味を僕は「神のよりしろ」だと思ってる。そこへ神様が降りてくるという意味ね。それから今でもやってるのは、そこにあるうちには神さん棚っての間っていうのがある。そこに飾り物とというか、お供えをする。一つはね、新鮮な、掘ってきた二股大根を取ってきて、供える。それはどんな意味があるかっていうと、大根って白いし、二股になっているということから女体を表してる。女体っていうのは、繁殖や生殖だから。それともう一つは、江戸時代からうちに伝わってるもんなんです。これも二股大根。これに鼠がついてる。これも同じ意味なんだけど、鼠っていうのも鼠算式に増えるとかっていうように、子沢山というか、繁殖がすごいやろ。ということで、二股大根と鼠の、これ木彫ね、これを神さん棚に飾るの。もっと他にも（代々伝わる歳時記）書いてあるんだけど、今でもやってるのは、それくらいのことかな。」(F氏)

生産業者は、豊作をかたどった二股大根と木彫を供え、ヨシの繁殖を願った。



図3-1 三脚状に立てたヨシ

3-1-2 生活に利用されていたヨシ

茅葺きの屋根が葺かれていた頃、屋根材は近くで取れる植物を利用していた。(図)琵琶湖沿岸では、屋根材にヨシを利用していた地域もある。屋根に使われるヨシの量は大量なので、個人で集めるには何年もかかる。地域によっては、屋根材用のヨシとして村で協同のヨシ場があった。

中主町の小浜では「共有財産である内湖が

あって、そこに生育するヨシの権利を、全村を六組にわけて平等に受けていた。村の共有財産として内湖とそこに生えるヨシは村で管理されていた。その管理をしている組織を『ヨシ仲間』とよび、このヨシを刈って集めて交代に屋根の葺き合いをしたというがユイの制度はない。14) という。

3-1-3 ヨシと農家のかかわり

農家は、春から秋にかけての農繁期が終わると、冬の仕事としてヨシ刈りを手伝っていた。ヨシ産業が盛んな時期は、よく売れたという。ヨシは飼料としても利用していた。

「刈るのは専門にいやはった。その頃は仕事がなかったから村へ頼むと全部刈りに言ってくれはんねん。我々は売るのが専門やったから。その頃朝刈ったら皆リアカで10台くらいで八日市からもってきやったわ。3時間くらい。車があらへんや。八日市から八幡まで道もないし、その時分は馬車かな、『まるこう』ていって丸子船で八幡堀まで舟で運んでた。八幡堀を中心

として瓦屋さんがあるでしょ、それも全部湖北のほうから芝を運んでた。それから(昭和)34,5年になってぼちぼちトラックが買えるようになったなあ。ヨシ業者が車買うたんは早かったわ。はこばなあかんし。景気が良かったし。地主もよければ加工業者も良かった。全部売れたし。(中略)」(G氏)

「ヨシの『刈りこさん』ていう人がいて、農家の人が冬の仕事にね、ヨシを刈りに出はったやんや。

あっちこっちにとりに歩いてたわね。刈っても高く売れたでいいわね。その頃は右から左やった。ものがないでね。ヨシなんて地主さんは誰でもうれるわな。なかなか次の人が途中で割り込んできても買えなんだ。地主と業者ががっちり手を組んでいた。昔はお互いがな、人間関係がよかったわな。仁義って言うかそういうものがあったから。今やったら高く売れるとこにまわすけど競争やな。」(G氏)

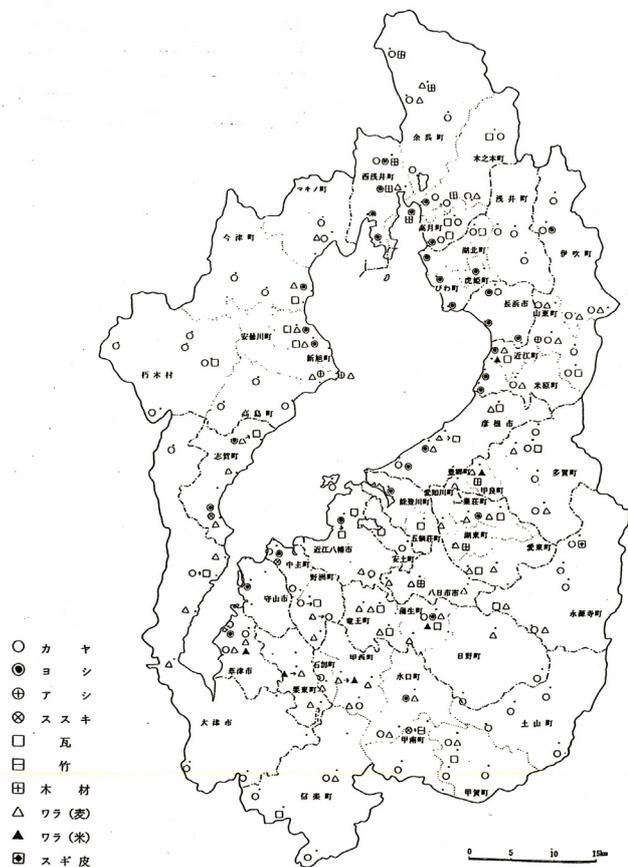


図 3-2 滋賀県内各地で使われていた屋根材の種類

「ヨシ刈り当初の雄琴の連合会長さんは、若い頃から、百姓してきはったんですよ。それで、昔の人が伝えとる中にはその当時はみな牛で耕作しとったんですね。牛の餌にちょうど4月、5月、6月、この時期にヨシの青い芽を刈って牛に食べさす、(その後) それ(ヨシ) がぐーっと伸びてきますよね。それが『いいヨシや』というて、例えば彦根の方から(ヨシが) そろわん業者が買いに来とった。太いヨシを。そうしてまた、やった(刈った) 後にはみんなでそのヨシ帯を燃やして、毎年繰り返してそういうことをやってたよ。」(P氏)

3-1-4 ヨシと漁師のかかわり

ヨシ帯はヨシ生産業者だけでなく、漁師にとっても大切な生活の場であった。昔は、ヨシ帯をそのまま漁に利用した漁法があった。ヨシ生産業者にとって、商品としてのヨシを傷つけられたくないということもあり、文献調査によると一定のルールが存在していたらしいが、ヒアリング調査では、ヨシ生産業者も共同で漁をしていたこともあり、持ちつ持たれつの関係があった。

(1) よしまき網漁の概要

葎巻網は、琵琶湖の沿岸や内湖に群生するヨシ原を、広い範囲にわたって包囲し、その中にひそむコイ・フナ・ワタカなどの魚類をいっきよに捕獲する漁法である。

この漁法は、かつての大中の湖周辺の漁民にとって主要な漁法一つであり、堅田・沖の島、尾上などにも見られた。しかし、これらの地域においては、葎細工に主眼があり、葎巻網はその副次的なものであった。これにたいして、積極的にこの漁法を行い伝承してきたのが、北山田(草津市)の漁師であった。北山田は、草津河口部に位置する集落であり、近世には、大津・坂本方面への渡船場として知られていた。個数の大半は農家である。漁師はとくに親方や網元というものもなく、小規模な独立営業者として存在していた。

北山田では、4~5人が一組となり、経験豊かなリーダーを中心として、追子・網引・裾踏・網揚の役割を分担していた。5~7月の産卵期を除き、いつでも漁が可能であったが、実際には7月下旬9月末にかけて盛期とした。

ほとんどの地が地先で行っていたのにたいして、北山田だけは、季節や、水温の変化に応じて、湖西の今津や湖北の尾上方面まで出漁するなど、好漁場を求めてその範囲を広げていた。シマの決定には相当の経験を要し、漁の成否は、すべてこの魚見にかかっていた。

元来、よしまき網は風波が穏やかでなければむずかしく、葎の微妙な揺れぐあいから、中にひそむ魚種や魚量を判断したものであるが、風あるときには、葎についた虫や、素手で確認した水底の土壌などに頼ることもあった。また、夜漁の場合は、葎原に魚群の出入りのするタイミングをみきわめるのがむずかしかったという。

戦前は、湖岸の葎はそれに続く土地所有者のものであった。葎の需要が多く、田一反よ

り葭一反のほうが入りがあったともいわれ、葭の所有者は、葭原での漁を歓迎しなかった。北山田の漁師は、漁獲の三割をシマ代として払い、漁の間にも、ヨシを傷めないように気をくばった。葭が傷むと腐敗を招き、魚類が近寄らなくなるので、漁師にとっても不都合であった。なお、葭巻網は、一度行くと、その後数週間は魚が寄らなくなるので、同じ場所に何度も続けて網を張ることはできなかった（図 3-3, 3-4）。



図 3-3 よしまき網漁の役割分担

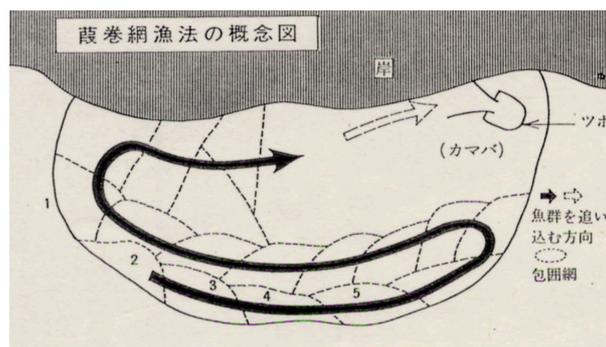


図 3-4 よしまき網漁法の概念図

(2) よしまき網漁（ヒアリング）

「西ノ湖は宝湖やった。西ノ湖ヨシ帯の周りには魚がものすごくようさんいた。私らは『よしまき』と言うて、海にほうからかこてくねん。（図 3-5, 3-6）ヨシを刈ってすぼめていくねん。『よしまき』をするのは冬が一番良くてな、何でかという冬は魚が動かへんから。ちょっとやったら 7,8m の田舟にいっぱい魚が取れたものや。漁師さんだけでなく、我々もつかんだ。おもしろいわけでね」（G 氏）

「ヨシ原は個人の私有地でね、みな権利を持ってた。我々業者は、入札制度で刈る権利を買った。（佐々木ヨシ、じょうらくヨシあなどヨシ地に名前があった）ヨシ業者も行くし漁師も入札に行った。ヨシ業者はヨシを刈るのがメインやし、魚は付属みたいなもんやっ



図 3-5 よしまき網漁に使う網



図 3-6 よしまき網漁の様子

た。漁師は魚がメインやで、あとでヨシは業者に売っていた。その頃は値段が高かったやろ、30年頃は食料が決して豊富ではなかったやろ、それを4,5人でしたら大工さんの日当3,40人分くらいあったわ。大工さんの日当が300円や400円くらいとしますやん、その30倍から40倍もうかったということや。」(G氏)

3-1-5 入札制度

昔は、ヨシの価値が高かったので、地主や神社、村の共有地に生えているヨシ地を「刈り取る権利」が入札にかけられた。

「入札は公の場やから、村のもの、(円山の村のもの)お寺のものとかそういうのは入札やるんやけど、個人が持っているヨシは業者と話し合いで買うときがあるわな。入札でやってたんは西の湖周辺で大体20箇所くらいあったかな。あとは個人やでねえ。安土にも『さききヨシ』っていうてね、大中の堤防辺りにね、6つくらいに分けてるでね。一号二号三号っていうてね。順番に落としていくねんけど。地主は上手にしとったんやけど、9月10月に台風が来る時期やねんけどちょうど台風がくる前に入札しよったねん。傷んだら値段が落ちるやろ？我々買うたもんも勘やかねないかんからね。『台風行ったらどうしようかね。』ほんなもん、全部倒されるときがあるもん。べったりかんに。折れたりしたら加工に使えないもん。刈るにしてもものすごく手間がかかるやん。起こさないかんし。」(G氏)

「向こうもいちばんに基本とするのは、はじめに公のところで入札をするやろ、それを見に来とんねん。値段を見て、それで『うちのヨシはもうちょっとよいから高い値段で買ってもらおか』というふうになるわな。この問題で取引してたわけやな。」(G氏)

「ヨシも種類もいろいろあってね、業者って言うのは、ヨシを一束刈って束を見ただけで安土のヨシ、能登川のヨシ、丸山のヨシってわかるねん。それによって値段が違うんやから。ちょうど2分から3分のヨシが好まれた。タバコよりちょっと細いくらいの太さが一番注文がきた。そういうヨシが生えているところは値段が良かった。長いヨシはあんまり値段が高くなかった。びわ町のヨシ、守山の木浜のヨシとか野洲で言うたら吉川のヨシとか全部違うにゃ。どこかに特徴があるんや。27,8年頃、我々の日当がこの時分で300円くらいやったときにええヨシやったら1束3000円したんや。」(G氏)

<まとめ>

ヨシ生産業者は、自然とのかかわりを大切にしているだけでなく、ヨシを媒介として人とのかかわりも深かったと言える。違う職業の人同士でも、お互いに助け合いをするしくみがあった。

表 3-1 琵琶湖周辺の主な内湖

内湖名	面積 (ha)	位置	干拓事業	ヨシ地の実態(漁業も含む)
1 ○ 塩津内湖	16.8	伊香郡西浅井町	県営, 1944~1951	・内湖の半分はヨシ地(琵琶湖側はヨシ、内側はヨシとマコモ) ・ヨシ刈り入れ
2 ○ 塩津婆婆内湖	16.4	伊香郡西浅井町	県営, 1959~1963	
3 野田沼	6.2	東浅井郡湖北町		
4 △ 早崎内湖	91.9	東浅井郡湖北町、びわ町	県営, 1964~1971	・内湖は半分位石垣積み、石垣以外の所は全てヨシ地(巾15m位) ・内湖の中にはヨシ地の島が2ヶ所あり、1ヶ所は磯、1ヶ所は筑摩が管理していた(1ヶ所約10~15反) ・毎年ヨシは刈って茅葺きの材料にしていた(地先の人)・藻はマコモは少ない ・周囲全部ヨシ地(巾10m)・刈って田んぼに使ってた(反~8俵) ・火入れなし
5 ○ 大郷内湖	13.9	東浅井郡びわ町	県営, 1944~1951	
6 浜須賀内湖	2.4	坂田郡近江町		
7 △ 入江内湖	305.4	坂田郡米原町	国営, 1944~1947	・沼の周囲全部ヨシ地・藻が多い~田の肥料(年1回一斉採取)
8 ○ 松原内湖	73.3	彦根市	国営, 1943~1947	
9 野田沼	15.0	彦根市		・巾20m位で全湖的に繁茂していた(山手側は巾2~3m) ・藻はマコモ中心にかなり密生していた ・ヨシは土木の許可をとり地先毎に刈り取り、毎年火入れしている ・茅葺き用に使用 ・よしまき(1回で700貫)
10 △ 曾根沼	87.0	彦根市	県営, 1963~1968	
11 神上沼・古矢場沼	7.2	彦根市		
12 伊庭内湖	49.0	神崎郡能登川町		
13 ○ 大中の湖	1,145.0	近江八幡市、蒲生郡安土町、神崎郡能登川町	国営, 1946~1968	・内湖一帯がヨシ生水面で、石垣等人工的な工作物はなし。特に南津田のヨシの品質はよく、夏のすだれ等の材料に用いられるほどであった ・但しヨシそのものの生産(収穫)や刈り取りの権利は地元津田は少なく外湖側に4町歩程所有しているに過ぎず、他の大部分は島村などが所有していた ・ヨシ巻網(小ブ)
14 ○ 小中の湖	342.1	蒲生郡安土町、神崎郡能登川町	県営, 1942~1947	
15 西の湖	221.9	近江八幡市、蒲生郡安土町		
16 北の庄沢	15.8	近江八幡市		
17 ○ 津田内湖	119.0	近江八幡市	国営, 1967~1971	内湖の周囲が石垣で構築されており、その全面の浅所にヨシ生地が繁茂していた ・ヨシ刈り(一部)屋根葺き
18 北沢沼	4.9	近江八幡市		
19 ○ 水荃内湖	201.3	近江八幡市	国営, 1944~1947	県営, 1943~1951
20 ○ 野田沼	39.5	野洲郡中主町	県営, 1944~1951	
21 ○ 繁昌池	33.8	守山市		
22 志那中内湖	2.5	草津市		県営, 1944~1951
23 平湖	13.4	草津市		
24 堅田内湖	7.9	大津市		
25 小松沼	7.8	滋賀郡志賀町		
26 乙女が池	8.9	高島郡高島町		
27 △ 四津川内湖	19.9	高島郡安曇川町	県営, 1944~1951	
28 五反田沼	1.2	高島郡安曇川町		
29 十ヶ坪沼	2.0	高島郡安曇川町		
30 菅沼	2.8	高島郡新旭町		
31 ○ 今津沼	—	高島郡今津町		
32 浜分沼	5.4	高島郡今津町		
33 △ 貫川内湖	16.0	高島郡今津町	県営, 1944~1951	

○: 干拓されたもの △: 一部干拓されたもの

3-2-2 琵琶湖総合開発について

昭和47年(1972年)から始まった「琵琶湖総合開発事業」は、当初は10年間の事業としてスタートしたが、その後2回の計画変更により平成8年(1997年)にほぼ完成した。

この事業は、琵琶湖の水資源の利用を促進すること(利水)を主な目的としているが、

そのために必要となる流域の水害防止、(治水)、水質など自然環境の保全・回復(保全)を合わせた3つの目的を事業の柱として位置付けている。

水資源をより多く利用するために、さらに水を貯め、低い水位まで利用できるように計画された。多く水を貯めるために「湖岸堤」が建設され、低い土地への浸水を防止した。

このような琵琶湖の水位管理が始まったことにより、冬季において渇水対策のために高い水位に管理されている。そのため、ヨシ刈りや火入れができないなどヨシ生産業者にとって深刻な事情となっている。²⁾ 内湖の干拓や琵琶湖総合開発の結果、1963年に260haあったヨシ原は、1992年には半減している(図3-8)。

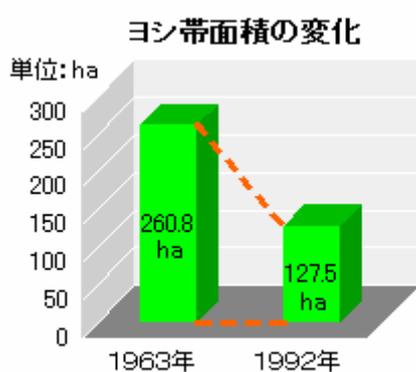


図3-8 ヨシ帯の面積の変化

3-2-3 湖岸堤によるヨシの影響

琵琶湖沿岸のヨシ帯においても大きな影響が出ている。湖岸堤が建設される前は、琵琶湖の水位変動により、ヨシ群落は適度に攪乱され生育していた。そのような「河口のように陸からたえず土砂の供給がある広大なヨシ帯を吉良は不安定型のヨシ(U型)と定義している。もう一つのタイプは、めだつた侵食も堆積もおこっていない安定した岸をふちどる、比較的幅のせまいヨシ帯である。このようなヨシ帯を安定型(S型)と呼んでいる。³⁾

吉良氏によると、「現在の琵琶湖では、人為的な水位調節により、琵琶湖はほとんど氾濫する機会がなくなったため、ヨシ帯のタイプはほとんどS型である」という。

S型に手を加えると群落のバランスが崩れ、ヨシ群落が衰退する恐れがあると指摘している。

3-3 保全に伴うヨシと人とのかかわり

3-3-1 ヨシ群落保全条例の策定とそれに伴う事業

人々は、開発によるヨシ群落の減少や、琵琶湖の水質悪化など目に見える環境の変化にようやく気づき、滋賀県では昭和50年代頃から環境保全に向けた取り組みが行われている。その一つとして滋賀県では平成4年に「ヨシ群落保全条例」を制定した。条例では、「ヨシを守る」「ヨシを育てる」「ヨシを活用する」の3つの柱で成り立ち、守る方法としてヨシ群落保全地域を指定している。区分は、「保護地区」「保全地域」「普通地域」とわかれており、保全の区域度合いによって維持管理を行う(図3-9)。平成5年にヨシ保全を主な事業として創設された淡海環境保全財団が、滋賀県内のヨシ帯の維持管理をしている。

また同時に市民参画型のヨシ刈りも行われるようになった。大津市では平成2年度から企業ボランティア中心の市民ヨシ刈りと学区民が中心の地域ヨシ刈りを実施している。

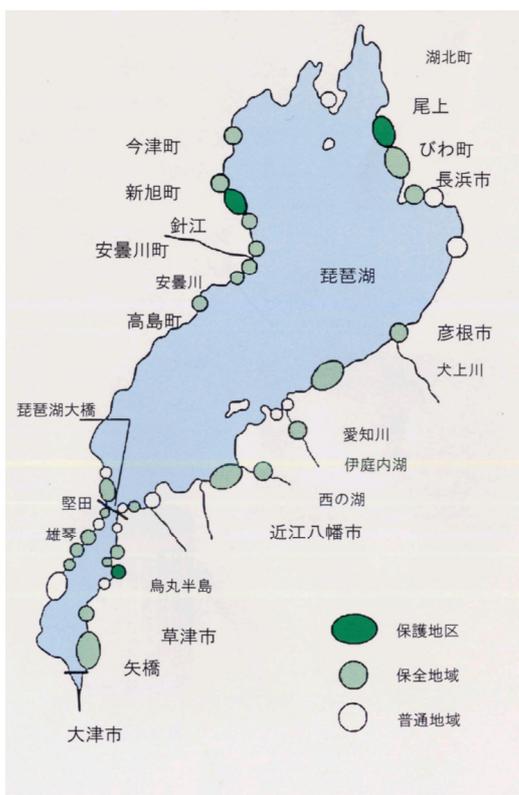


図 3-9 ヨシ群落保全条例指定地域



図 3-10 淡海環境保全財団の維持管理の一例

参考文献

- 西川嘉廣：ヨシと人の暮らしとの係わり，関西自然保護機構会報，21，2，p301-338（1999）
 倉田亮：内湖—その生態学的機能—，琵琶湖研究所所報，p 46-478（1983）
 琵琶湖干拓史編集局：琵琶湖干拓史、p47-50 晃陽堂

1) 滋賀民俗学会：野洲川下流域の民俗

2) 琵琶湖を学ぶ HP <http://www.biwa.ne.jp/~kawasima/study/tisui/kanri.html>

3) 吉良竜夫：ヨシの生態おぼえがき，滋賀県琵琶湖研究所，9,29（1992）

写真（△） http://www.shiminken.net/watch/eco_people/nishikawa/top.html

内湖（図） http://www.biwa.ne.jp/~kawasima/study/tisiki/tisiki_1.html